
孤独な天才と努力の姫

黄色い紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な天才と努力の姫

【Nコード】

N2728Q

【作者名】

黄色い紅葉

【あらすじ】

魔法が支配する世界『ミラ』。そこに万能の天才と言われた少年がいた。そこに誰にも真似できないほどの努力をする少女がいた。少年は脆く、少女は強かった。

これは孤独な心の少年と強すぎる心を持った少女の絆の物語。シリアス多め、基本的に主人公最強なのでご注意を！！

1話 出会い(前書き)

ちよっとずつ進めていきますが、どうぞよろしくお願いします!!

最初の方は題名がコロコロ変わりますごめんなさい!

1話 出会い

魔法が支配する世界『ミラ』

魔力が高ければ高いほど、強ければ強いほど

この世界では偉大になる。

そして、魔力は遺伝し、魔力が強い家系と強い家系が結び付き、やがて貴族に。

その中でも高かった一族は王族と呼ばれるようになり、国を造り、支配した。

これはそんな世界の大貴族に生まれた少年と小さな貴族に生まれた少女の物語。

グレイ・シュタット・フォルムはこの国の大貴族と呼ばれる家の長男として生を受けた。

リフィーナ・コレット・ダルクはこの国の小さな貴族の家の次女として生を受けた。

ふたりが出会ったのは5歳のころ。
街のはずれにある貴族たちが住む地域。通称、貴族街のほど近くに
ある自然公園だった。

リフィーナがベンチに座っていると一人の男の子がしきりに胸の前
で手を動かし空中に何かを描いているのが目に入った。

「何してるの？」

リフィーナが聞くと少年はきよとした顔で

「何って、魔法の練習に決まってるでしょ？」

と言った。

「魔法ってお父さんたちが使ってる、あの？」

今度はリフィーナが首をかしげた。

「ああ、きつとその魔法。ぼく魔力が多いらしいから、いっぱい練
習して将来、大魔導になるんだ」

腕を広げ空中を見上げながら話す少年。

「大魔導って偉いの？」

しかし次の瞬間には衝撃の発言によって危うく転びそうになる。

「し、知らないの！？大魔導っていえばこの国で多さ魔の次に偉い
んだよ！？」

「だったら多さ魔になればいいのに・・・」

リフィーナがそう言うのと少年はクスッと笑って遠くを見るように言った。

「無理だよ。王様ってとくっても、偉いんだ。強いだけじゃない。優しくていい人だってお父様も言っているよ。僕の夢は、大魔導になって王様を守ることなんだ」

「ふん」

「ふんって・・・」

興味ない、と言った感じのリフィーナにあきれる少年。しばらく話していた2人だったが日が暮れてくると少年が言った。

「もう日が暮れちゃうね。そうだな前言ってなかったね。僕の名前はグレイ。グレイ・シュタット・フォルム。君の名前は？」

「私、リフィーナ・コレット・ダルク」

「そっか。また明日もおいでよリフィーナ。明日は魔法見せてあげる」

「本当？」

「本当だよ！楽しみにしててね！」

「うん！！」

そして、次の日も、その次の日も、そのまた次の日も。雨の日以外は毎日のように公園で遊んだ。

しかし、2人は突然引き裂かれる。

リフィーナの親がそのことに気がついたのだ。

グレイの家は大貴族。自分の娘はしがない貴族。釣り合うはずもない。最悪、もしフォルム家にばれれば自分の家がつぶされるかもしれない。

そう考えたリフィーナの親はリフィーナを部屋に閉じ込めた。

一週間が過ぎたころ、リフィーナは部屋を抜け出し公園に行った。

しかしグレイの姿はなかった。

あきらめて帰ろうとした時、リフィーナは背後で足音を聞いた。ふと振り返ると一週間前と変わらない少年。グレイが息を切らして立っていた。

「はあ、はあ。リフィーナ・・・」

「グレイ・・・」

少年がリフィーナに近寄ろうとした時、リフィーナは彼の動きを止める。

「来ないで!!」

「!?!」

「そのまま聞いて!今日は、お別れを言いに来たの。私たちもう会

うべきじゃないと思うの。グレイは大貴族、それに魔法だってすごく強い。それに引き換え私は、何のとりえもない、ただの貴族。これ以上は私たちにとって良くないと思うの……」

示されたのは明らかな拒絶。

「そ、そんなの！」

グレイも必死に言葉を遮ろうとするがリフィーナの意思は揺るがない。

「わかって！今の私たちじゃ、このままだともっと大きな問題になるの！」

「……っ！」

「だから、さよなら、だよ。グレイ」

あふれる涙を拭おうともしないでリフィーナはその場を後にした。グレイもその場で大粒の涙を流す。ふたりは帰り際あることを決意する。

「待ってて、グレイ……きっと私、強くなっていつかグレイに似合う女になるから！それまで、待ってて！」

「魔法の強さがすべてなら、もう、魔法なんて使わない！魔法なんて、大っ嫌いだ！」

2人が出会って3年。グレイ8歳、リフィーナ7歳。あまりにも悲しいすれ違いだった。

そして、2人はすれ違ったまま、16歳になった。

2話 入学（前書き）

大体このくらいの長さで行きます!!

2話 入学

*****リフィーナ・コレット・ダルク*****

魔法がすべてのこの世界で、自らの地位を決めるものはやっぱり魔法だ。

たとえ貴族出身であってもそれは例外ではなく、庶民出身の者が貴族より出世するということは、よくとまではいけないものの珍しいことではない。

その場合のほとんどは突然変異と呼ばれるもので親同士の魔力の相性が深く関係しているといわれているが今だ説明はしていない。

リフィーナは貴族出身であるが、小さな家の出なので魔力は本来一般家庭よりも少し高いといった具合になるはずだった。

『努力で魔力は上がる』

これは魔力発見の当初から広く知れ渡っていたこと。

しかしリフィーナの場合は努力が桁はずれだった。グレイに別れを告げたあの日から、寝るときとご飯、風呂以外のほとんどの時間を魔法の練習、魔力の底上げに使った。

それにより、リフィーナは14歳のときにはすでに同年代最強クラス仲間入りを果たしていた。

才能でも突然変異でもない。言うなれば、努力の天才。彼女自身そう呼ばれるのはうれしかったし、何より長年想っている彼に近づけたと思うとうれしさ以上の何かがこみ上げてくるのを感じていた。

『国立第弐魔法学園』

この国にある5つの魔法学園で最も多くの『魔導師』を輩出する、国立の学園。つまりは学校だ。

彼女はこの学園に特待生として入学することが決まっていた。

国に仕える魔法使い、『魔導師』は『大魔導』になるためには避けでは通れない道、その一番の近道が学園への入学だった。

幼いころ毎日のように聞いていた彼の夢、その一番の近道にリフィーナは立っていた。

彼女は彼もおそらく学園、それも国立第弐魔法学園に入学するはずだと信じていた。それほどまでに彼の力はずば抜けていた。きっと彼は『大魔導』になれる。

その時、『彼の手助けをして支える』それが彼女の夢になっていた。

春。学園入学の時がやってきた。

国立第弐魔法学園は彼女が住んでいた街から離れていたために彼女は学園から歩いて15分ほどの場所に一人暮らしすることになった。学園がある街に来たのは1週間前。

一人暮らしは初めてだが、入学が決まっただけからというもの、母や数少ないメイドさんに家事を教えてもらっていたので生活には困らなかった。

欠伸を一つ落としリフィーナは目覚めた。

窓からはすでに朝日がのぞいている。今日は入学式。式自体は10時からだが、集合時間は9時半。しかし現在の時間は7時と割と余

裕がある。

再びあくびをしながら起き上るとまずは洗面所へ移動する。

顔を洗うと髪に櫛を入れ丁寧に入入れをしていく。幼いころから自慢にしている黒髪は現在腰のあたりまで伸ばしている。昔はショートだったのだが魔法を優先するあまり髪の毛を切ることをすっかり忘れていた。

しかしそれが功をなしたのか、周りからの評判は上々。それ以来ずつと髪はロングにしている。

一通り終えたところで今度はキッチンへ移動し料理を始める。

現在暮らしているマンションはなかなかの広さで1LDK。ちゃんと立派な風呂と洗面所付きだ。リフィーナの両親の知り合いのマンションらしく値段はタダ同然。

室内はきちんと整理されており、白を基調とした落ち着いた色合いにとどころどころにピンクなどが見え隠れしている。

ダイニングテーブルも白のものでその上に白とピンクのテーブルクロスがしてある。その上にパンとサラダ、コーンスープとコーヒーという洋風な献立がさらに並べられている。

献立の理由は洋食が好きだからとかではない。どちらかといえば肉より魚のほうが好きだがこっちはほうが早い、という理由で朝は洋食になることが多々ある。

紺色基調の制服に身を包み家を出る。時刻は9時。ちよつと余裕があるがそれくらいでちょうどいいと思ったりリフィーナはローファーをはき、マンションを出た。

行きがけ、自分と同じ制服を着た女子生徒、おそらくこの制服とペアである制服に身を包んだ男子生徒を大勢見かけた。近況していた顔もあつたのでおそらく自分と同じ新入生だろうと思いきや通じる道を歩いて行った。

学園はこの街のおおよそ4分の1を占めているといわれるほど広い。さまざまな部活が使用するグラウンドに加え、実技で使う専用施設。魔法科学の実験棟、教室等、管理棟などがすべて十分すぎるスペースを得ているので当然といえば当然だが・・・。

それでもこの学園を初めて見たリフィーナは感動した。

ここに、グレイがいるかもしれない。

そう思うと胸の高揚が止まらない。最初から止める気など毛頭ないが。

それにもし彼がいないとしても、彼女が目指すべき場所は『大魔導補佐』というはるか高み。今まで以上の努力が必要とされる超難関。さまざまな思いの中、リフィーナは門をくぐった。

入学式は滞りなく行われた。

新入生代表の生徒が一般家庭の出というのに驚いたりしたりリフィーナだったが、心の底ではグレイを期待していた分ちよつと残念に思っていた。

それでもきつとこの中のどこかに、と入学式の間キヨロキヨロしていたリフィーナだった。

「ずっと、キヨロキヨロしてたね。知り合いでも探してたの？」

という質問に「まあね」と答えるリフィーナ。現在は下校中だ。

リフィーナの隣で同じ制服を着て歩いているのは入学式で隣の席だったエレス・克蘭ファルという女子生徒。

特待生の一人ということだ話し始め、気が付いたらすっかり意気投合していた。

エレスもリフィーナ同様小さな貴族の出だった。それも努力の天才タイプ。

家もリフィーナのマンション近くだといっているのでこれから行き帰りを一緒にする約束までしていた。

帰宅後。少々疲れを感じてはいたが何ということもないので買い物へ行くことにした。もちろんエレスも一緒に。

買い物の内容はやっぱり服等であるが、一人暮らしのリフィーナは食材の買い物もすることした。

「いっぱい買ったね」

「買いだめしとかないと、面倒だから」

「へへ、なんだか主婦見たい」

「ありがとう」

今はスーパーの買い物がちょうど終わり、帰宅している。片手に服屋の袋、もう一つの手にはさまざまな食材が入った袋。エレスはほしいものがあまりなかったようで小さな袋だけだ。

二人が歩いている道は割と大きな道で街路樹の奥には多くの魔車まじやが走っている。

他愛のない話をしている時反対側の道に目を引く人影があった。

茶色いショートヘアに基準より少し小さめの背。女と言われればそれで納得してしまうような容姿。しかし国立第弐魔法学園の制服。しかも男子の制服を着ていることからおことだとわかる。表情は暗めだが、なんだか懐かしいような気がした。

結局リフィーナはその姿が消えるまでその場に立ち止まりその背中を眺めていた。

「どうしたの？探してた知り合いでもいた？」

「ううん、ちょっとボーとしちゃっただけ、疲れちゃったのかな？」

「だったら早く帰ろう、マンション、もうすぐでしょ？」

「うん」

結局その日寝るまで、その姿が頭から消えることはなかった。

翌日、マンションの前に昨日友達になったばかりの少女がリフィーナを待っていた。

「もう大丈夫？」

心配そうに聞いてきた少女に「大丈夫」と伝えたと、安心したような顔をしたエレスをみてクスッと笑うリフィーナだったが、まだ頭には昨日の少年の顔が浮かんでいた。

学園に着くなり教室へ向かう。

この学園は2つのコースに分かれている。魔法専攻科と魔法科学科。リフィーナとエレスは魔法専攻科の特待生。クラスで言うと1-M。

魔法が最も進んでいる国の言葉で『魔法』の頭文字をとったものらしい。

魔法専攻科と魔法科学科差は、主に将来にある。軍隊、魔導師へ就職する者は魔法専攻科。企業などに就職する者は魔法科学科。

『大魔導師補佐』を目指す彼女にとっては当然の選択であった。もちろん彼も。

そう思つてやまないリフィーナ。

彼女が魔法専攻科に彼、グレイ・シュタット・フォルムの名がないのを知つたのは1週間後だった。

3話 グレイの居場所

魔法の原理は極めて単純だ。

まず体の中にある魔力を指先に集め円を描く（魔法陣生成）。

それに単語を1つ。たとえば『火』だったり『水』という言葉を言う（詠唱）だけである。

それだけでその描いた円から火なり水なりが出てくる。

しかしこれは初歩の初歩。

実際には円を描いた後、その中にさらにさまざまな図形を書き入れていく。図形と図形の相性、正確さなど様々な要因がプラスされることにより魔法はより高度なものとなる。

それに詠唱も単語よりは文、文よりは詩、詩よりは歌と実にいるいるあるため、魔法全体の数というのは数千とも数万とも言われている。

しかし50年ほど前、魔法界に革命的な出来事がおこった。

『魔法科学』と呼ばれる分野の登場だ。

魔法科学はそれまでも存在した『科学』と呼ばれる分野と魔法との距離を0にまで縮めた。

その内容はもともと魔力が少ない一般家庭のために開発された技術で魔法を行うというものだった。

詳しく言うと、携帯式のMMEと呼ばれる機器で空中にまじりかき魔導物質と呼ばれる空気中に存在する魔力を通しやすい物質を噴出し魔法陣生

成を行い、その魔法陣に自らの魔力を流す。といったものだ。人々はこの魔法を魔法科学魔法と呼んだ。

威力こそ従来の魔法には劣るものの、MMEを操作することで一瞬でしかも正確に魔法陣生成を行うことができるため、より実戦的でほとんどの魔導師が愛用するほか、日常生活の中のとえば車の減速などでも活躍するため、いまでは最もメジャーである。

リフィーナ・コレット・ダルク

リフィーナもMMEを使用する人間だ。

MMEは現代魔法科学ないし科学の最高作品と呼ばれている。リフィーナの使用するMMEは魔法科学業界の最大手であるフォルム社の製品を使っている。会社名からもわかるように彼、グレイ・シュタット・フォルムの実家が運営する会社だ。理由は言わずとも。まるで彼に魔法を助けてもらっている気がする。という理由もあるが、なぜかほかの会社の製品よりも自分に合っている気がするのだ。

学園に入学して早1週間。この学校にグレイの名がないことにかっかりしたりリフィーナだが、きつと別の学園で『大魔導』を目指しているはずなので、と思い必死に努力することを決意した。自分には努力しかないのだ。

それはリフィーナ自身グレイと離れた時からわかりきっていることだった。

「ねえ。今日の放課後も忙しいの？」

「毎日毎日、しつこいわね。私は忙しいの！ちょっとでも暇な時間なんてないわ！」

「またまた、そんなこと言っても本当は遊びたいんでしょ？」

教室に入り、席についてエレナと他愛もない話をしていると一人の男がリフィーナ達に近づき話しかけてきた。

くせ毛の茶髪が特徴のこの男子生徒はテルム・F・トーマス。入学式の次の日、つまり初日からリフィーナとエレス特にリフィーナにちよっかいを掛けて来る貴族出身のチャライやつだ。

「ほんとにもっとまじめに生きなよ」

エレスがため息交じりにそして諭すように言うが、テルムは「十分まじめさ、ところで・・・」といった感じですぐに流してしまふ。しかし次に続いた言葉にリフィーナは釘づけになる。

「あのフォルム家の長男がこの学園に入学してるって知ってる？」

ただでさえ大きめな目をさらに大きく見開いて絶句するリフィーナ。魔法専攻科は隅から隅まで調べたはず・・・まさか、飛び級してもう上学年に？！

さまざまな思いを巡らすテルムの言ったことはとても信じられないはずがないものだった。

「1・Sにいるらしいよ」

「え？なんて？」

「だから、フォルム家の長男が1-Sにいるらしいよって話！」

目の前の男子生徒が言っていることが理解できなくてももう一度きき返すリフィーナだったが、やはり間違っていないと知ると信じられない単語に首をかしげる。

Sって魔法科学の特待生ってこと？なんで？魔法科学じゃ『大魔導』にはなれないのに・・・。

その日の授業はその話以降、全く頭に入らなかった。

「どうしちゃったの？ずっとボーとしてるよ？」

日が傾きだした帰り道。いよいよ心配になってきたエレスがリフィーナに問いかける。

「そ、そんなことないよ!？」

「だって、テルムのやつと話してから授業中もなんだか窓の外眺めてたみたいだし」

明らかに動揺したようなりフィーナにはあつとため息をつき今日の授業中の光景を思い出す。これまで完全に優等生だったリフィーナが急に教科書も出さないで窓の外を眺めているというのはだれの目

に見ても不自然だった。

「ひよっとして・・・フォルム家の人がこの学園にいるっていうのと関係があるの？」

その瞬間ビクンと体に電気が走ったように震えるリフィーナを見て「やっぱり」と言いながら、「ねえ、もしよかったら教えてよ。リフィーナとその彼との関係」と心配そうな顔はどこにいったのか、うれしそうに聞いてくるエリス。

今度はリフィーナがため息をする番だった。

少し大通りを外れた場所にある公園に、子供の姿は全くない。それは時間もあるがここが公園といっても遊具があるというよりは緑が多い公園なのに関係しているのかもしれない。

ベンチに腰を下ろした2人は、来る途中に買ったアイスクリームを舐めている。

ちよっとしてリフィーナが話し始めた。

「5歳くらいの頃ね。近所の、ちょうどこんな風に緑が多い結構大きな公園で魔法の練習をしてる男の子と会ったの。」

「それが、フォルム家の？」

「うん。グレイの夢は『大魔導』になることだね。その時も楽しそうに話してたな。ですっかり仲良くなって、その日以外もほとんど毎日その公園で遊んでね。けど、私が8歳になる1か月前くらいにそれが両親にばれちゃったの。」

「大貴族としない貴族の差ってやつ？」

「それだけじゃなくてね。グレイ、当時の私でもわかるくらい魔法が上手だったの。私たちあって遊ぶっていうよりグレイの練習を私はずっと見てて、たまに話しかけるって感じでね。・・・で、ばれすぐに私部屋に閉じ込められちゃったの。もう会いに行かないようつて。その時私、いろいろ考えたんだ。ここから抜け出してもまた閉じ込められちゃうんだろうなとか本当にいろいろ。で、私が出した結論は私が彼に似合うくらいに『魔導師』に、そしていつか『大魔導補佐』になろうって決めたの。それを伝えたくて何とか抜け出して公園に行ったの。で、そこでグレイに私の気持ちを伝えて、それから必死に頑張ったんだ。グレイに追いつくためなら何だってやった。毎日遅くまで魔法の練習もした。学園からの推薦状が来たときはそろそろ会いに行ってもいいかなって気にもなってたんだけど彼も絶対に学園に来るはずって思ってた会に行かなかったの。」

「それでか。入学してからずっとだれか探してたもんね。なるほど、彼が学園に来ていたのはいいけど魔法専攻科じゃなくて魔法科学科を選んだのが納得いかないと」

「うん」

小さな返事をするエレスは立ちあがって言った。

「とりあえず会ってみようよ、そのグレイ君に!!」

4話 再開の時(前書き)

毎日少しずつ書いていくので更新は不定期になります。

4話 再開の時

*****リフィーナ・コレット・ダルク*****

会ってみる。

それはリフィーナにとつてとても勇気がいる行為だ。

彼女ははつきりと自分がグレイに恋愛感情を抱いていると自覚している。ずっと幼いころから。

だからこそリフィーナは彼のために、彼にい会う女性になるためにという思いで頑張ってきた。

しかしだからこそ、いざ会つとなると勇気が出ないのだ。

そう考えだしてもう5時間ほど経っていた。

夜ベットに入ってからなかなか寝付けないでいるリフィーナ。

「どじしよめ」

ちょっと白めの肌をしているリフィーナの顔は今耳まで真っ赤になつてしまっていた。

「どじしよめ」

帰ってきてから何度目かもわからない言葉はなんだか今にも泣きそ
うに聞こえる。

結局この日リフィーナは1時間しか寝ることができなかった。

*****グレイ・シュタット・フォルム*****

国立第式魔法学園の入学式の日、彼、グレイ・シュタット・フォル
ムは家（学園近くのマンション）に帰った後街をぶらぶらと散策す
ることにした。

彼のクラスは1-S。魔法科学科の特待生のクラスだ。

大貴族の一員、しかも長男である彼が魔法から離れることは不可能
だった。

彼の親は彼が目を真つ赤に腫らして帰ってきた日、彼がもう魔法は
使わないということに戸惑いを隠せないままだったら「魔法科学の
道に進みなさい」といった。

もともと彼の才能は魔法・運動・勉強・芸術とさまざまな分野に至
っていた。魔法科学もその一つだ。

フォルム家が魔法科学を専門に伸びた家系ということも大きく関係
しているのだが。

そんなこんなで彼は今まで魔法を使わないで生活してきた。

この道に誇りさえ感じるようになってきていた。しかしどうしても
笑うことができなかった。たとえば初めてMMEの調整を成功させ
た時、魔法科学機器を発明した時。いや表情は笑っていたかもしれ
ない。しかし本心では笑えない。

本来なら、いや昔なら喜べたことなのに笑うことができないのだ。それはきつと初恋の彼女からの拒絶の跡。心に残った大きく深い傷。

きつとそれらはこの先も埋まることのないものだ。とグレイ本人自覚していた。

今も歩いているとすれ違う人に、彼女の面影を探してしまう。彼女を思い出し、気がつくといつも彼女のことを考えてしまう。今日は彼女に拒絶され『魔法は使わない』そう決めた日のように夕日がきれいな日だと思つとなぜかグレイは悪くない気分だった。

入学から1週間たち、初めて実施される授業がある。魔法科学科は魔法専攻科と違い魔法は全く使わない。借りに使用するときがあったとしてもちよつと実験的に魔力を流してみる程度のことだ。

しかし今日はちよつとそういうわけにもいかなかった。魔法専攻科特待生クラスとの合同実戦魔法科学演習。

この日、とうとう2人の止まっていた時間が動き出す。

*****リフィーナ・コレット・ダルク*****

MMEの使用練習授業、実戦魔法科学演習。

より早く、正確に。MMEに入る魔法陣の数はMMEによって異なるが最大のものとなると50近くにもなるので魔法陣を選択するスピードも重要になってくる。

その総合的な練習をする時間だ。しかしその中での誤差の調整などはペアになった魔法科学科の生徒に任せることになる。

実戦魔法科学演習が通常の魔法専攻科で行うその他の授業とは違い、Mクラスとの合同授業だということをまったく知らなかったリフィーナ。

昨日はいろいろあって授業のことなど全く聞いていなかったため、今朝親友であるエリーナにそのことを聞いたりフィーナだったが緊張はしているものの、決心がついたのか「よし！」というとすんなり授業に集中してしまった。そんな様子を「あれ？」となんだか不思議そうに見ていたエリーナだった。

しかしいくら決心がついているといっても授業に集中はできていない。集中しているように装っているが内心はずっとドキドキしている。

(やっとあなたに会える！)

緊張は高まるばかりだった。

*****グレイ・シユタット・フォルム*****

グレイはまだリフィーナが自分と同じ学園にいることを知らなかった。

「あの、グレイ君。この部分なんだけど・・・」

「貸して」

グレイは話しかけてきた同じクラスの女子生徒の手にある機器を受け取る。

これはちよつと高度な部分で魔車の核となる部分だ。

予想していた通りの部分でつまずいていることを察すると、特殊な工具を使ってICチップのような部分をいじり始める。

1分ほどで作業が完了したようで再び女子生徒に機器を返す。

「ありがとう！グレイ君ってホントすごいね！」

世間ではおそらく美少女の部類に入るであろう彼女の笑顔にクラス
の馬鹿な男子は熱い視線を送っている。

しかしグレイはその中の数少ない例外だった。

「これくらい自分でやってよね」

少し冷たい感じで言い放つグレイ。

「う、うん！今度からは頑張るから！！」

しかし、それにもめげずに笑顔でグレイの元から離れていく。

彼女の名はエリカ・コルン・ヴァンク。

大貴族の1柱、ヴァンク家の次女。

この1-Sで高嶺の花のような扱いを受けている少女だ。そしてグレイの昔からの付き合いでもある。リフィーナとも知り合いで3人で例の公園で遊んだこともある。そんなエリカが立ち止り言った。

「今日の実戦魔法科学演習、楽しみだね！」

「……」

エリカは何が言いたいのかわからないといった感じのグレイに、いたずらっぽい笑顔を見せ再び歩き出し自分の席に着いた。グレイはまだ知らない。彼女が唯一グレイとリフィーナのすれ違いを知っている人だということ。

リフィーナ・コレット・ダルク

午後になり、本日最後の授業でもある実戦魔法科学演習の時間がやってきた。

1-S、Mはこの時間第3実戦室に移動となり、リフィーナとエレスはチャイムの鳴る少し前にこの教室にたどりついた。

リフィーナは教室に入るなり、2つの塊があるのを感じた。おそらく魔法専攻科と魔法科学科とが分かれて集まっているのだろう。しかしまだチャイムは鳴っていないので、先生の指示というわけではないだろう。

見知った顔が全くないほうの塊をエレスが指さした

「リフィーナ、あれじゃない？」

ふっと指さされたほうを見ると壁に背中を預けている瀬の小さな少年がいる。この前、買い物の帰りに見かけた少年だった。

教室に入ってきたリフィーナを見たエリカの反応は早かった。

グレイのそばを離れすつとリフィーナと知らないもう1人を目指して歩いて行く。

「リフィーナちゃん！」

リフィーナも手を振りながら向かってくるエリカを見つけると驚いたように目を見開いた。

「エ、エリカちゃん!？」

リフィーナの目にはグレイと自分の幼馴染でもある大貴族に名を連ねるエリカの姿をしつかりとうつしていた。

驚いたままのリフィーナにエリカはハグ、というよりも思い切り抱きついた。

「会いたかったよー！リフィーナちゃん！！きれいになったね！」

最初こそ戸惑ったものの、昔はよくこうしていたと思い、リフィーナもエリカを抱きしめ返した。

「うん、私も会いたかった。けど、どうしてここに？」

なんで?といった感じで見つめるリフィーナにニコニコしながら

「どうしてって私も一応大貴族だから、学園にくらい入るでしょ?」

「けど、Mクラスにはいなかったから、てっきりほかの学園に言ったんだと思ってた」

「もう!リフィーナちゃんの意地悪!私が魔法苦手だって知ってるでしょ?」

そうだった。とリフィーナは昔を思い出す。

ある日リフィーナが公園でグレイを待っている時、一人の女の子がリフィーナに話しかけた。

「あなたがリフィーナちゃん?」

「うん。あなたは?」

「私はエリカ・コルン・ヴァンク。グレイ君の友達なの」

「グレイの?よろしくね、エリカちゃん!」

「うん!」

それからグレイが来るまで2人はいろいろなことをして時間をつぶした。その中に『グレイのまね』というのがあった。最初にリフィーナが簡単な魔法を使って、いつもグレイが練習している通り歌を歌った。しかし、当時幼いリフィーナは『歌』というのがどれほど高度なものを全然理解していなかった。結果は失敗。

「アハハ！難しいね、やっぱり！」

笑顔で言うリフィーナにポカーンと口をあけているエリカ。しかしすぐに我に返るとリフィーナを信じられないといった感じで見えた。

「すごいね！リフィーナちゃん！難しい魔法陣だったのに、MMEも使わないで、ほとんど完璧だったよ！！私魔法使えないからうらやましい・・・」

「え？エリカちゃん魔法使えないの！？」

「リフィーナちゃん！聞いている！？」

「え？あ、うん！聞いているよー！」

リフィーナはハツとして視線を戻すすると、目の前には心配そうなエリカの顔がある。そこでリフィーナが深刻な顔をする。

「ところで、グレイは？」

その質問に待ってましたと言わんばかりに目を輝かせるエリカ。

「あそこだよ。行って来て、グレイ、リフィーナちゃんがいないな
ってかなり悲しんだ」

「うん。ありがとう」

そう言うと壁にこちらを見て呆然としてる男の子に向かってリフィーナは歩き出した。まるで彼から離れてからのこれまでの日々を思い出すようにゆっくりと歩く。

二人の距離が一気に縮まる。

「・・・グレイ」

リフィーナがぼつりと、しかしはっきりと言った。

「・・・リフィーナ」

グレイもようやく事態が呑み込めたようで少し空いて返事をした。

その光景はまるであの日、リフィーナがグレイを、グレイがリフィーナを見つけた時に酷似していた。まるでただ体が大きくなっただけのように。2人の瞳は宝物を見つけた子供のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2728q/>

孤独な天才と努力の姫

2011年2月5日13時06分発行